



アートコミュニケーター「ひらく」。年齢も背景もさまざまな人が集まり、アートを介してつながっている



年齢も職業もさまざまな人が集まるアートコミュニケーター



ワークショップの企画のため、作家のアトリエを見学し、制作のテーマを取材



活動では、まずお互いの意見を「聞く」ことを大事にしている



ディスカッションしながら考えを深める



演劇の手法によるワークショップで仲間を知る

# SCARTSアートコミュニケーター 「ひらく」

## Art Community communicator HIRAKU

SCARTSアートコミュニケーター「ひらく」は、市民とアートのつなぎ手として活動しているチームです。

展覧会での鑑賞プログラムやワークショップの企画運営、ウェブを使った情報発信など、その時々で方法を変えながら、アーティストや専門家も巻き込んで多様な活動を行っています。

一般市民からひろく募集されるアートコミュニケーターは、年齢も職業もバラバラ。さまざまなバックグラウンドを持った仲間たちが集まります。彼らは3年間の任期の間に、共に講座を受け、勉強会を行ったり、意見を出しあったりしながら企画を組み立てて実行し、活動を深めていきます。

「ひらく」の活動を通じて生まれるのは、アートと市民との関わりだけではありません。アートを介した人と人との関係や居場所、活動を通じてかたちづくられるネットワークなど、幅広いものがあります。多様なメンバーがフラットに意見を交換し、ものごとをつくっていく「創造的なコミュニケーションの場」での経験は、任期を終えた後のそれぞれの活動につながっていきます。

SCARTSでは、市民の創造的な活動を支援し、長期的な活動を通して地域コミュニティの形成と活性化につなげ、新しい芸術文化と市民との関わり合い方をデザインすることを意図し、SCARTSアートコミュニケーターの活動を進めています。

### 「ひらく」の由来

SCARTSアートコミュニケーターの活動は、交流プラザ開館前の2018年8月から始まりました。当時は愛称はありませんでしたが、活動を続ける中で、「自分たちの活動をあらわす親しみやすい名前がほしい!」という声があがり、みんなで案を持ち寄り、話し合って決めた名前が「ひらく」です。

「ひらく」という言葉には、未来に向かって動いていくイメージがあります。

アートを通して人的心を開くこと、  
そのための方法を共に切りひらき、  
互いに啓きあうこと

それが、「SCARTS アートコミュニケーター『ひらく』」の活動です。



# SCARTSアートコミュニケーター 「ひらく」の活動

## 鑑賞サポートプログラムの実施

SCARTSで開催される展覧会に合わせて、「対話による鑑賞」という手法を使った鑑賞サポートプログラムを行っています。キュレーターや作家による作品解説ではなく、参加者同士の対話を通して、作品と能動的に向き合い、鑑賞を深めていく手法です。

「教える／教えられる」という非対称な関係ではなく、フラットな関係の中で言葉を紡ぎ出すことで、知識の有無にかかわらずさまざまな人と作品の出会いをつくると共に、多種多様な作品との「関わり合い方」をつくり出します。



「さっぽろアートステージ2018」での対話による鑑賞

## ワークショップ等の企画・運営

さまざまな人たちと協働しながら作品鑑賞や工作をする経験を通じて、ひとりでは得られない「気づき」を創出するワークショップを企画し、実施しています。札幌市民交流プラザは多様な人が交差する場所です。普段美術に接しない方にも、他の人の交流や、手を動かすことで、文化芸術への関心をもってもらえるよう内容を検討し、実践しています。



ワークショップ「つながるはじまるたんけんたい」(2019年1月開催)の様子

## ウェブでの情報発信

SCARTSアートコミュニケーターはSNSやウェブサイトを使ったアクティビティも活発です。情報発信サイト「鑑賞レポート」では、それぞれが観た展覧会やコンサートなどについて論じたり、インタビューなどの取材記事を発信したりしています。あわせて、文章の基本的なテクニックを学んだり、専門家による添削を受ける機会も定期的に設けています。

インターネットをめぐる状況は日々変化していますが、こうした活動を通じて、そこに流通する言葉がどのようなものなのかを考えることで、新しいコミュニケーションのかたちを探っています。

## 自主企画＋勉強会

SCARTSアートコミュニケーターに参加する人々のバックグラウンドは多種多様です。それぞれの興味関心や得意なことを生かして、自主企画の立案や運営を行っています。

企画を進める条件は、「3人以上の賛同者を得てからスタートさせること」。大切にしているのは、発案者がリーダーシップをとって何かを進めることではなく、いろいろな人たちが関わることで物事に変化が生じていくプロセスです。

また、それぞれが関心のある事柄や作品について話し合う勉強会(通称:ゆる勉)も、活発に行われています。アイデアの種を見つけ、ゆるやかに育んでいくための土壌をつくり出しています。



講座「アートの書き方」(2019年5月開催)の様子。美術評論家の福住廉氏



札幌市教育文化会館で開催されるオペラ公演に合わせ、オペラの楽しさや深さを知ってもらおうと、「あいうえ～オペラ ミニレクチャーコンサート」を企画・開催した。チームをつくり、内容を深め、事前準備から当日の進行まで、アートコミュニケーターで行った



# SCARTSアートコミュニケーター 「ひらく」の活動を支えるために

## 講座

よりよいミーティングの方法、文章の書き方、「ワークショップ」についての考え方など、基礎的な知識やスキルを、みんなで話し合いながら学んでいく講座を多数用意し、月1～2回程度開催しています。また、当初予定していないくとも、メンバーの関心や要望に応じて必要な講座を新たに実施することもあります。

重視しているのは、参加者同士で話し合いをしながら学びを深めていくプロセスです。それによって知識やスキルを多角的に捉えると共に、参加者それぞれが持っている価値観や考え方のコアな部分に触れながら、お互いを知る機会を創出します。こういった取り組みが、SCARTSアートコミュニケーターの自主的な活動を支えています。



講座「グッドミーティング」(2019年6月)の様子。青木将幸氏を講師にファシリテーションの実践を学んだ

## 活動事例

2019年11月24日(土)、SCARTSで開催された展覧会「まなざしのスキップ」にて、対話による鑑賞サポートプログラムを実施しました。アートコミュニケーターがファシリテーターとして行う、観客と作品をつなぐ試みが実現に至るまでのプロセスをご紹介します。



### ① 2019年11月4日(土・祝) 講座「対話による鑑賞について」

「対話による鑑賞」の研究と実践に長年取り組んでいる、北翔大学教育文化学部教授の山崎正明先生による講座を実施。この日の講座では、まず山崎先生と一緒に実際の展覧会を鑑賞し、その後、展覧会の企画者から展覧会や作品についてのレクチャーを行いました。その後、対話による鑑賞を行う中でファシリテーターとして気をつけるべきこと等を学びました。メンバー同士の話し合いの時間では、6月に受講した会議についての講座、「グッドミーティング」で学んだ内容が生かされます。



### ② 2019年11月15日(金)、16日(土)、20日(水)、22日(金) 自主練習

アートコミュニケーター同士が自主的に声をかけ、鑑賞プログラムのための練習が行われます。アートコミュニケーターも学生や仕事を持っているメンバーが多いため、夕方、仕事や学校の帰りに立ち寄れるメンバーが集まり、作品の前でシミュレーションを行います。どのような順番で作品を鑑賞したらいいか検討したり、あるいは個々の作品の不明点や気になったところをシェアしたりしながら、ブラッシュアップしていきます。



### ③ 2019年11月16日(土) 「さっぽろアートステージ2019」鑑賞サポートに向けて

実践のための講座が行われます。ここまでで講座や自主練習の内容を踏まえ、当日のタイムスケジュールや担当者、確認事項などがまとめられます。また、当日の活動のチェックポイントや、疑問点を書き出すためのチェックシートが作成され、アートコミュニケーターに渡されます。作品の前に立って、細かいポイントをブラッシュアップ。その後、みんなで良かったところや、気づいたポイントを話し合います。



### ④ 2019年11月24日(日) 本番

いよいよ本番。午前・午後に分かれての実施です。当日展覧会を訪れた観客が対象ですが、最初はあまり人も集まらない様子。しかし、いざ始まって作品の前に立つと、徐々に気になった人が足を止め、耳を傾け、声を発してくれるようになります。展覧会がオープンな場所での開催であったことも手伝って、通りがかりの人が「何してるの?」と参加してくれることもあります。特に、元気な子どもたちには助けられました。綿密な準備が生かされつつ、想定外の驚きもたくさん生まれます。



### ⑤ 2019年12月26日(木) SNSで報告

アートコミュニケーターの活動は、参加者自身がSNSで報告していきます。成果を報告するだけではなく、実行に至るまでのプロセスの紹介や、気づきなど、詳細にレポートします。5月と7月に行われた文章の書き方講座「アートの書き方」で学んだテクニックもここで生かされています。